エイブル床の間コーナー

「岩永京吉作品展」ギャラリートーク

期日：令和５年１月 28 日（土）
場所：吉田祐彦記念館
　　能舞台（鹿島市中村）
講師：石川宗晴さん
　　（岩永京吉美術館館長）

「京吉画業に訪れた宿題」

▲ 講師 石川 宗晴さん

おはようございます。寒いところ、本当にありがとうございます。

今日は、私の興味の対象である「岩永京吉」という人物について話したいと思います。京吉さんは、自筆の文章や収集していた資料をたくさん残してくれておりますので、それをもとに人物像を探るのが私の老後の楽しみになっています。ただ、楽しみが先行して、独りよがりな分析になっているんじゃないかなと思うので、ここで「それは違うんじゃないか」というところを教えていただければ、と思っています。

私の勝手な解釈だと「画家は自分の描きたいと思った対象しか描かない」というイメージですが、「こうしてくれ」とか「ああしてくれ」と言われて制作することもあるようですね。

▲ 石川さん制作の冊子

京吉さんは、自分で対象を選んで描く作品以上に、依頼された作品に力を注いでいたようで、今回は「京吉画業に訪れた宿題」というテーマで、内容をまとめていこうと思った次第です。

京吉さんは、絵でも文章でも、自分の生み出したものをよく残してくれています。

例えば、北鹿島小学校 3 年生の時に描いた風景画です。「評価は甲の上だった」と裏に書いてあります。自分の出発点と思ったのか、ファイルに挟んで、散逸しないようにしてありました。

京吉さんは戦争も経験しています。昭和 16 年、24 歳のときに召集令状がきて出兵しています。ビルマ、中国の国境で捕虜になっていますが、収容所間を移動するときのスケッチが

残っていました。後に『祐徳さん』という佐賀新聞記事の中で、「武運長久のお守りを持っていたから助かったのではないかな」というようなことも言っています。

それから 15 年経って、39 歳の時に涅槃図の作画依頼を受けています。

7 年前になるんですけど、古枝の興善院さん所蔵の涅槃図の表具を更新する、ということで表具屋さんが持ってきて見せてくださいました。こういう作品があったんだということを制作から 60 年後に初めて知りました。

この涅槃図を描いてから 15 年後。今度は、新しくなるという祐徳博物館の目玉と言ってはおこがましいかもしれませんけど「壁画を描いてほしい」ということで、「萬子媛の一代記」の依頼を受けています。

▲ギャラリートーク風景

そして、また 15 年後に「吉田能舞台の松図と竹図」を制作しています。

同じ年に、日春展で奨励賞を貰って、「私の青春」というテーマでサガテレビのインタビューを受けています。インタビューでは、浪人して、東京美術学校に入り、卒業後は、長野県の中学校に赴任したこと。そして、そこで美術部を作ろうとしたら、官製の美術部に対する生徒の反発を受けたことなどを話したようです。また新聞にも、奨励賞を貰ったことが掲載された。これがきっかけかどうかわからないけど、能舞台の松図と竹図を描くことになったようです。

奇しくも 15 年ごとに大きな宿題をもらって制作してきた京吉さんですが、まずは、戦場でも描くことを忘れなかった京吉さんについて話をしようと思います。

京吉さんは「長野県で中学校教師をしていた昭和 16 年の終わりに召集を受けて、翌年の 2 月に門司港を出発し、3 月の終わりからビルマ、中国の国境近くで陣を張った」と記録しています。

その間、戦いばかりかというとそうでもなくて、スケッチができる時間もあったらしく、村の様子をこっそりスケッチしていたら、隊長に見つかって「何をしている！」ということになったようです。でも、その後、絵描きとして勤務することになって、その地域のスケッチをしていたようです。名前は「戦績の記録」。

戦った後、どういう作戦でどう進軍したかとか、そういうことを絵図に描くんだと思うんですけど、「戦績の記録係」という名目で隊長付きになっていたようです。

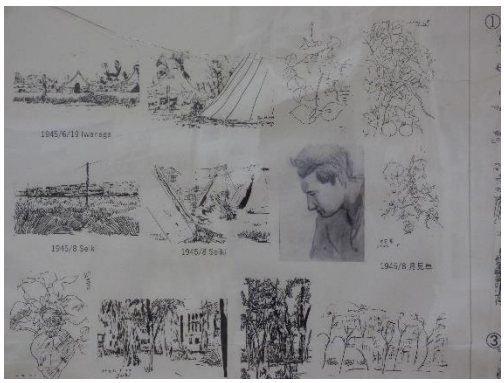
戦況が厳しくなってからだと思いますが、昭和 19 年の春に機関銃隊に戻っています。

5 月 12 日に、中国の国境のサルウィン川を超えたところで敵と遭遇して、部隊の仲間は死んでしまったそうです。京吉さんは、伝令として本部に状況を伝えるために、川を下って

いきました。後で考えると、本部は 200 キロぐらい下流であったそうです。このことも戦記として「川に飛び込んでいく」と書き記してありました。

実は、京吉さんは孫からパソコンの使い方を教えてもらっています。「孫が突然パソコンを持ってきて、面白いからと言って教えてくれた」と。「孫の特訓のおかげで 38 ページの文章ができました」と言って、当時、茨城に住んでいた私たちに『サルウィンの月』と題した文章を送ってくれました。捕虜になってから 54 年目に、大学ノートに清書していた「捕虜記（サルウィン河の月）」を、そのパソコンで活字にしたんですね。

それで、捕虜としてどういう生活をしていたのかがよくわかりました。



▲収容所でのスケッチ（昭和 20 年 8 月）

では、収容所にいる時はどうだったのかというのが、つい 4 年前に分かりました。上海に居られた立見さんという方が 98 歳で亡くなられて、その娘さんが遺品整理をしている時に「Ｋ．ＩＷＡＮＡＧＡ」と署名のあるスケッチが見つかった、と。それが、回りまわって鹿島にいらっしゃった友達を通じて「これって京吉さんですかね？」みたいな話になって。

送ってもらったら、描き方がよく似ていたので、「これは京吉さんじゃないか」と。ちょうど終戦の日にはひまわりを描いていました。

こういうふうに、京吉さんの絵はずっと続いていたんだというのが分かりました。

重慶から送り返されるときのスケッチも 70 枚ほど持って帰ってきていました。村の様子やおばちゃんが洗濯したり料理をしたりしている様子などを描いていますが、温かい雰囲気で描いているなぁと思います。

▲収容所でのスケッチ（昭和 20 年 9 月）

昭和 21 年 6 月に鹿児島港に帰還し、長野県の中学校から鹿島中学校に転任しました。

鹿島に戻って書き始めた制作日記の表紙に「芸術へ！芸術へ！」と書いています。「悲哀に包まれながら、時の流す新しい息吹に、微かな悦びを含んでいる」とも書いてありました。

絵を描きながら、教師としても頑張っていたようで、昭和 22 年には『工芸大観』という名前で、生徒に教える内容をまとめていました。また、『西洋工芸美術沿革』や『セメントの理論と施工法』というのをまとめています。「竹の利用とその加工」というのもありまし

た。「標準的な家具の寸法」も教えていますので、戦後で品物が十分でなかった時代に、生活用品を作るときに基準になるものを生徒には教えておこうと思ったのかもしれません。それと同時に『人間性開発の歴史と日本画の方向』というテーマで、自分はどんな日本画を描くのかというような文章も書いていました。

そして、昭和 26 年に県展が始まっています。県展は、洋画の出品数は多かったようですが、日本画は数点で、審査に来られた立石先生は「こんなに少ない数の中から選び出してもなぁ」と思っていらっしゃったようです。それで、県展に日本画を出してくれる人を募ろうという事で、白羽の矢が立ったのが、美術部で日本画を習っていた興善院のご住職のおばさんにあたる方でした。

「ぜひ県展に出してくれ」と興善院さんに通ったみたいなんですね。結局は出されなかったと思うんですけれど、何度か通っているうちに、御堂の中に古い涅槃図があるのを見てなのかどうか、詳しい経緯は分かりませんが、涅槃図を制作するという依頼を受けた格好になっています。

私が自宅の倉庫から涅槃図のスケッチブックを見つけた時に「どこでこんな模写をしてきたんだろう？」と思っていましたが、浜町の泰智寺から興善院に贈られた涅槃図だったということが分かりました。

それを大下図に作り変えて、本紙を制作していっているんですが、人物の表現が模写から大下図、本紙と、その度ごとに変化しているんですね。描きながら、京吉さんなりの解釈も変わっていったんだと思います。

▲涅槃図（岩永京吉作）興善院蔵

涅槃図を描くにあたって、京吉さんはいろいろな文献も調べていたようです。

登場人物の名前を一覧表にしてありましたが、だれがどこに描かれているかは分からないです。

釈迦の入滅を嘆き悲しんでいる者たちの場面構成は、大下図の時には歪んだように見えるんですけど、最終的には、横に外れている者も内側に入れて、丸い形になるように描いています。

お釈迦さまの描き方は、時代によってもいろいろ違って、枕を当てたり手枕だったり。どういう格好をしているかによって、描かれた時代が分かるということもあるようです。

母親の摩耶夫人はスケッチがありました。スケッチのページには「吉川霊華」（明治大正時代の日本画家）というメモがありましたので、彼の描き方を参考にしたのかもしれません。お釈迦さまのお母さんですから凛とした姿です。

会衆の中には、無精髭まで描いているものもあります。全体的に、会衆の表情が若いというか精気があるという感じがします。

▲ 涅槃図の菩薩

こちらは菩薩ですね。経典によると、菩薩だけは釈迦の入滅を静かに受け入れている、ということで、京吉さんは、深く思考しているような表情を描いているように思います。

お弟子さんの方は、びっくり仰天、泣いている、悲しんでいるという表現だそうです。涅槃図を間近で見れば見るほど、一本一本の線を丁寧に描いているなあと思います。

龍は、色を変えているのが鱗のように見えてきて、おもしろいなと思いました。牛は、参考にした涅槃図では水牛になっているんですけど、京吉さんは和牛にしています。

次に、祐徳博物館の『萬子媛の一代記』について話をさせていただきます。

▲『萬子媛一代記』

京吉さんが 54 歳のときですが、当時の博物館の館長さんから『萬子媛の一代記』制作の話があったと。京吉さん自身も「私を育ててくれた環境の中にこそ、偽りのない私の心が潜んでいる」という気持ちで制作に取り組んだようです。昭和 46 年 2 月に話をいただいて制作を始め、最初は、80 歳の入定の頃を描いて、次にお嫁入りの時を描いて、くつろがれている時を描いて、祐徳社の建立、という形になっています。

萬子媛の若い時の姿は分かっていないんですね。京吉さんは祐徳稲荷神社に残されているものを見たり寺院に行ったりして、考証していったんだと思います。

宮司さんが言われるには、「入定された時のお顔を若返らせると、ぴったり萬子媛の若い時の姿になっている。年を取って、こういう姿になられた」と。「一人の人物の成長をずっと追えるような形に繋がっている」と言っていただいて、上手く描けているんだなと思っています。

▲『萬子媛一代記』下図

また、「祐徳稲荷神社は、萬子媛から始まっている、というのを説明する時に、萬子媛の姿が壁画で分かるので助かっている」とおっしゃっていました。晩年の萬子媛、つまり祐徳院さんの姿からスタートして若返らせたのが、京吉さんの『萬子媛一代記』かなと思います。

最後に、「吉田能舞台の松図・竹図」でございます。

昭和 61 年は日春展で奨励賞をいただいた年でもあり、69 歳の京吉さんにとっては「すごく嬉しいことで、松図・竹図も一生懸命描いた」と記しています。

5 月に吉田祐彦さん夫妻の依頼を受けて 43 日ぐらいでまとめています。アトリエいっぱいに広げて描いていますね。

以前、こちらで「能舞台の松図のいわれ」について話したことがありまして、その時は「春日大社の影向の松を写し取ったもんだ」という説明をしたんですけど、その後、北方町の永林寺のご住職が文献を送ってくださいまして、その『能と狂言』という中に「松の絵と能舞台をめぐる一考察」というのがありました。そこに「鏡板の松は、春日大社の一の鳥居の影向の松を写したものである」との説は、明治大正期に提唱された新しい説だと説明されていました。

松や竹は季節に左右される植物ではなく、お殿様たちも応接間の障壁画として好んで描かせていたようです。

能舞台も季節ごとの演目はあるんですけど、季節と関係ない演目もあります。先日、佐野登先生がおっしゃったのは「季節に分けると五つあるんだ」と。つまり、季節と関係ないのが一つある、と。そういう演目でも合うようにということで、常に青々として、季節を感じさせない松と竹がふさわしい。と。

この文献（永林寺のご住職におくってもらったもの）におもしろい話が載っています。

1612 年、萩城を竣工する時に、雲谷等顔（※萩藩毛利家の御用絵師。雲谷派の祖にして、桃山画壇の巨匠。1547 年、藤津郡能古見城主 原豊後守直家の二男として生まれたと伝えられる）が「萩城の舞台の松を描け」と言われたらしくて、その時に朱をたくさん貰った、と。文献には「二十匁の朱」（※1 匁＝3.75ｇ）と書いてあるんですけど。京吉さんの描き方を見てみると、地に朱を塗っているんですね。どういうふうに塗っているのか、私も見た事はありませんが、制作日記には「朱で下地を塗る」と書いているので、下地に塗るとなると、たくさん必要だったんだろうと思います。

雲谷等顔が、萩城の松図を描き始めたのは 1600 年頃です。16 世紀の終わりごろから松図が描かれ始めたらしいので、雲谷等顔は結構早くから松図を描いていたと思われるような内容になっています。

江戸期になると、権威を示すために松図を描いても「格の上の人はたくさんの枝を描いてもいいけど、外様方（格下）ではそんなに立派な松を描いてはいけない」ということで江戸幕府にお伺いを立てて、幕府の御用絵師が描いたお手本を模倣して描くということで、形式化されると同時に管理されていたようです。

明治期になると、だんだん自由になってですね。能楽師さんの解釈で、代々発展するように根っこも描かないし梢も描かない、と。すっくと立ちあがっている絵を孫に残したいという思いで描かれる松とか。

昭和期になると、国立能楽堂の松は伝統を全然重んじていない描き方で「いかがなものか」という風評が立ったこともあったようです。でも、きちんとテレビで放映されているので、受け入れられているんですよね。今では、デザインのような松を描いてあるところもあります。

▲吉田能舞台　「松・竹図」

京吉さんは、幹が奥に伸びている、奥行きのある松を描いています。京吉さんは、昔から松は好きだったようで、スケッチもしていますが、奥にうねった松のスケッチは見つかっていません。

私なりに現存している松図を調べてみたら、京吉さんのような松はありませんでした。それについて、ここの能楽堂でワークショップをされている佐野登先生に聞いてみると、「能舞台の松というのは、存在感とか自己主張がなくてはいけないけど、有り過ぎても困る」と。「京吉さんの松は、最初は、昔ながらの松とはちょっと違うと思ったけど、実際にここで演じてみると、しっくりしてきた」という言葉をいただいたので、安心したというか、よかったなあと思っています。

今、京吉さんの描いた松が舞台にも映って、能が始まる前の雰囲気作りに役立っていると思うと嬉しいですね。この舞台の下には瓶(かめ)が置いてあって、すごく音響効果も良くて、広い見所がある。立派な舞台になっていると思います。

▲「松・竹図」の鑑賞風景

京吉さんは依頼された宿題にどう対処してきたのか。多分いろいろな方法で資料を集めて、そこから研究し、自分の作品を創造していったのではないかなと思います。やっぱり、頑張っているなぁと思います。

85 歳になった京吉さんが「まだ、これからだ」というふうに書いているのを見ると、私はそこまで頑張れるかどうか。「やっぱり京吉さんは凄いなぁ」と「そのようになりたいなぁ」と思っています。

どうも、ご清聴ありがとうございました。